芸術の世界から見た「水」の風景

(第二回

大 橋 欣 治

§ 第2章 文 学 ح 水 (続

日本文学・ 一〇選 (その2)

(2) 『万葉集

ち この丘に 菜摘ます児 家聞かな 名告籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持 らさね そらみつ やまとの国は おしなべ 我こそは 告らめ て吾こそをれ しきなべて 吾こそませ 雄略 天皇 (巻一・一)家をも名をも

私こそ名乗ろう、家も名前も) 持って、この岡で若菜を摘んでおられる乙女 めているのだ、全部私が支配して居るのだ。 よ、家をお告げなさいな、ことごとく私が治 (かごも良いかごを持ち、へらも良いへらを

> 共和には 群 - 大和には 群 - 1 国ぞ あきづ島 群山あれど よりよろふ 大和の国は 国見をすれば 国原は かまめ立ち立つ うまし

舒明天皇 (巻一・二)

に飛び立っている。素晴らしい国であるよ、 登っている。海原には、白い鴎の群がしきり と、広い平野には、炊煙があちこちから立ち い天の香具山、そこに登り立って国見をする (あきづしま) 大和の国は) (大和の国には多くの山々があるが、最も近

ら、複数の人々が関わったものと推測されてい 成立年代についても、巻ごとに時期が異なると での合計4500余首の歌が集められている。 る。通巻では、5世紀の後半から8世紀中期ま ついては、諸説があるが、全20巻に及ぶことか 日本の古典として代表的な作品である。編者に から始まる『万葉集』は『古事記』と並んで、

> 見られている。また、歌の原文は、すべて万葉 訳は訳者によって若干違う部分がある。 この万葉仮名(漢字)を、漢字と仮名とを交え 仮名といわれる漢字で書かれている。現在は、 代の末期、遅くとも平安時代の極初期の成立と 古写本によって原文が異なることもあり、現代 た体に書き改めて、読みやすくしている。なお、 考えられるが、 最終的には、8世紀末の奈良時



明日香・大和三山 (中央:畝傍山、左:耳成山、 右:香具山、奥:三輪山) (出典:朝日新聞社「写真でみる万葉集」)

傷の歌)、謦喩歌 (本意を物に託-)て4 消息を通じ問い交わすこと)、挽歌消息を通じ問い交わすこと)、挽歌 (くさぐさの歌)、相聞 (歌い手は、天皇・貴族から防人・庶民に至るま く人に別れることを悲しむ歌)、 題材は恋愛に限られている)、四季(春夏秋冬 人たちに及んでいる。 で、さらには読み人不詳もあり、 人々が詠んだ歌)など実に様々である。さらに、 を読んだ歌、 日本独特な分野)、悲別歌 (本意を物に託して述べた歌、 東歌 様々な階層の √(死喪や哀) (東国の (旅ゆ

らの中から代表的な歌を紹介したい。 選んだのは、「水」を直接的ないし「水」に関 などを読み込んだ秀作が多いことによる。 連した雨・雪・雲・雷・湖沼・川・滝・海・潮 沢山の秀歌が多いが、「水」の日本文学として この『万葉集』には、多岐のテーマに亘った これ

御念よりは 鏡 王女かが糸のおほきみかが糸のおほきみ 勝っているでしょう、 (秋の山の木の下をひそかに流れて行く水の 見えなくとも思いの量は私の方こそ 私を思って下さる以上 吾こそ益さめ (巻二・九二)

かめど道の知らなく やまぶきの立ちよそひたる山清水 汲みに行

ことだよ) 汲みに行きたいとは思うが、 、山吹が美しく咲き繁っている山中の清水を、 高市皇子 道が分からない (巻二・一五八)

巻向の山べとよみて行く水の 水沫のごとし

世の人吾は

石そそく垂水の上のさわらびの一流のようなものだ。現世の我々は、 春になりにけるかも (巻向 0) 山辺を響かせて流れて行く川の水の 柿本人麻呂 (巻七・一二六九) 萌え出づる

早飯はひとりなるべしとはが芽を出す春になったのだな) しょう) 刈って炊いた初飯を食べるのはあなた一人で 上句・尼、 (佐保川を堰き止め水を引いて植えた田を、 (岩の上にほとばしり落ちる滝のそばのさわ 下句・大伴家持 志貴皇子 (巻八・一四一 (巻八・一六三五) 刈 れる

雨 障 常する君はひさかたの[雨] (ひさかたの) 、雨の日はいつも閉じこもっているあなたは、 昨夜の雨にすっかり懲りてし 昨夜の雨に懲 (巻四·五一九)



志貴皇子の田原西陵付近の 土手のわらび (出典:別冊太陽「万葉集入門」)

石上ふるとも雨に障すったのでしょうか) そめにけり 春雨に争ひかねてわが屋前の一櫻のあなたに逢おうと固く約束したもの 言ひてしものを ((石上)降っても雨などに妨げられるものか。 (春雨にさからうことができずに、 ひてしものを大伴像見上ふるとも雨に障らめやのかみ 柿本人麻呂 (巻十・一八七○) 妹にあはた 櫻の花は咲き (巻四・六六四) 我が家の

秋田刈る旅のいほりに時雨ふり桜の花は咲きはじめたなあ) る干す人無しに わが袖っ ぬれ

の袖は濡れた。乾してくれる人もなくて) 、秋の田を刈る旅の刈屋に時雨が降って、 本人麻呂 巻十・二二三五 私

ふる雪はあはにな降りそ吉隠のに降るのはまだまだ後のこと) らまくは後のちのち わが里に大雪ふれり大原の (我が里に大雪が降った。 天武天皇 大原の古ぼけた里 古りにし里にふ (巻二・一〇三) 猪養の岡の

塞なさまくに 、降る雪よ、 沢山に降るな、 穂積皇子 吉隠の猪養の岡 (巻二・二〇三)

(巻三・三一八) **不**ふ 盡じ

もっている かすと、真っ白に富士の高嶺に雪は降り積 子の 浦 から眺望の良い地点に出て見はる

田

田子の浦から見た富士山 (出典:朝日新聞社「写真でみる万葉集」)

雪のうれしからまし 吾背子と二人見ませばいくばくか このふる

筑波嶺に雪かもふらる否をかも 愛しき見ろ が布乾さるかも つくばね
いな
かな
かな
かな
かな
かな
かな
かな
かな
かな いとしいあの娘さんが布を晒しているのかな) (我が君とふたりで見るのだったら、 筑波嶺に雪が降ったのかな。いや違うかな。 藤皇后(光明皇后) 東歌き (巻十四・三三五一) (巻八・一六五八) どんな

渡津海の豊旗雲に入日さした。 みとよはたくも とこはたくも |雲] 明くこそ 中大兄 (天智天皇) 今夜の月夜 清 (巻一・一五)

(大海原にたなびく見事な旗雲に夕日が強く

雷の上に仮の庵を作って宮としている) 差して、今夜の月は明るくさやかであってほ せるかも **大君は神にしませば天雲の** 、我が大君は神でいらせられるので、天雲の 柿本人麻呂 雷の上にいほらいかづち (巻三十二三五)

> に雲立ち渡る 今日限り見て、 ((ももづたふ) 磐余の池に鳴いている鴨を、 (私は死んでいくのか) (巻三·四一六) 今日のみ見

弓月が岳に雲が一面に立ち渡る ((あしひきの) 山川の瀬が鳴り響くと共に、 柿本人麻呂 (巻七・一〇八八)

[湖沼・河川・滝

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば となくまた還り見む 見れど飽かぬ吉野の川の常なめの も萎えるばかりに過ぎし日々が思い出される) (近江の海の夕波千鳥よ、おまえが鳴くと心 にしへ思ほゆ 柿本人麻呂 (巻三・二六六) 心もしのにい 絶ゆるこ

うに、常に絶えることなくまたこの地に帰っ て来て見よう) (見ても飽きることのない吉野川の常滑のよ 柿本人麻呂 (巻一・三七)



夕霧の琵琶湖 (出典:別冊太陽「万葉集入門」)

うに、 のだ 戀にあらくに 明日香河川淀さらず立つ霧の (明日香川の川淀を去らず立ちこめる霧のよ すぐ消えてしまうような恋心ではない 山部赤人 (巻三・三二五) 思ひ過ぐべき

もののふの八十字治河の網代木にもののふの八十字治河の網代木に 波の行方知らずも 4 さよふ

のここだ愛しき **ら番目こさらす手作さらさらに 何ぞこの兒**て滞っている波の行く方が分かない) さらに、 ((もののふの) 八十宇治川の網代木に遮られ 〈多摩川で晒す手作りの布のように、゛さらに どうしてこの児がこんなに愛しいの 柿本人麻呂 相が見る (巻十四・三三七三) (巻三・二六四)

山高み白木綿花に落ちたぎつだろうか) ことがない く流れ落ちる滝のほとりの地は見ても飽きる れど飽かぬかも 山が高いので、 白木綿花のように白く激し 笠金村 (巻六・九〇九) 瀧の河内は見

海・潮

今はこぎ出でな 額田 王 (巻一・八)熟田津に船乗せむと月まてば 潮もかなひぬなあ。包んで妻へのみやげにしよう) づとにせむ 安貴 王 伊勢の海の沖つ白波花にもが きた、さあ、 ていると、潮も満ちて船出に都合よくなって 、熟田津で船に乗り込もうと、 (伊勢の海の沖の白波が花だったら良いのに 今こそ漕ぎ出ようではないか 月の出を待っ (巻三・三〇六) 包みて妹が家

若の浦に潮満ち来れば潟を無み (若の浦の潮が満ちてくると、干潟がないの **葦辺をめざして鶴の群が鳴き渡る**) 山部赤人 (巻六・九一九) 葦邊をさし

万葉集』 の最後は、 次の歌で締めくくられ

新しき年の始めの初春のている。 (新しい年の初めの正月の今日降る雪のよう ますます重なってくれ、良いことが 大伴家持 (巻十二・四五一六) 今日ふる雪のいや

ぶり)といわれている。この歌風も、 の歌風は、 その一部を取り出したに過ぎない。 化の動向と切り離せない。 の確立、 の大和政権による国土統一と、その後の天皇制 これらの「水」に因む歌は、未だ多くあるが、 律令国家の成立という政治・経済・文 素朴で力強く、「万葉調」 漢字や仏教などの外 『万葉集』 (ますらを 4世紀頃



柿本人麻呂画像 (出典:古橋信孝編「万葉集を読む」)

集』(1205年成立)の情趣・技巧的な家風 作られ、高揚した人々の日本民族としての生々 乱などの内乱の中で、 の「新古今調」とは、全く一線を画す。 今調」 (たおやめぶり)、さらには『新古今和歌 100首)の優美・繊細・技巧的な歌風の「古 集である『古今和歌集』(905年成立、 しい息遣いが伝わってくる。その後の勅撰和歌 来文化の伝来、朝鮮半島との緊張関係、 律令国家の姿が徐々に形 壬申 約 1

ることを記しておきたい。 王朝』(中公新書、2001)という著書があ なお、付則であるが、千田稔著『飛鳥―水の

どの発掘・保存も本格化していなかった状況で、 もほとんど舗装されていなかったし、 そんな立地条件であったことから、 住んだところは、 図るという大プロジェクトであった。そこに、 盆地まで足を伸ばした。当時、 天皇を祭った橿原神宮のある橿原市であった。 分水路の建設について徹底的な訓練を受けた。 いわば初年兵として、2年間、主として吉野川 分水するとともに、紀ノ川筋の水の供給安定を ていたが、この吉野川の水を新規に大和盆地に 川は、その上流の奈良県に入ると吉野川と称し というところであった。 紀ノ川農業水利事業所(奈良県吉野郡大淀町) した。その初めの勤務地が、近畿農政局十津川 春に大学を卒業して、 私事であるが、私は、 明日香、奈良 吉野川に面した下市町と神武 (大和)盆地、さらには京都 直ちに農林水産省に入省 和歌山県を流れる紀ノ 昭和39年(1964) 明日香は、 休日は、吉 藤原京な

> ある。 その後発掘された遺跡など、これから『記紀』 できた。しかし、それでも、 季折々の風景と歴史探訪を十分堪能することが なかった。そんなことから、 観光客もまばらで、住宅開発もそれ程進んで 『万葉集』を携えながら訪ねたいところが沢山 見損なった地域や 明日香を含めて四

注

(1) 筆者が、勝手に上 いる。 一句と下句の間に一字開け

(引用・参考文献)

- (以下同じ)
- 佐竹昭広他校注:『萬葉集 (全4冊)』、新日本文学大系 の歌の現代訳はこれによる) 1~4、岩波書店(1999~2003) (注:本文中 1938

927、53・53改版) (注:本文中の歌はこれによる) 佐々木信綱編:『新訓万葉集 (上・下)』、岩波文庫

- 斎藤茂吉著:『万葉秀歌 (上·下)』、岩波新書 68改訂
- 朝日新聞社編:『写真でみる万葉集』、 朝日新聞社 19
- 神野志隆光監修:『万葉集入門』、 別冊太陽、 平凡社

3 紫式部 『源氏物語

らひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際いずれの御時にか。女御・更衣、あまたさぶ にはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、 、ずれの御時にか。女御・更衣、 ありけ

 \mathfrak{h}_{\circ}

りにも長編物語であり、 戦したこともあるが、 言葉も難解であり、 気を残しているといわれていた谷崎潤一 がなかった。 であり、 風でいえば、 ことがない。 習ったが、最も不得手の科目であった。 いきなり私事であるが、高校生時代に古文を 人公とする宇治10帖からなる長編小説である。 前編4帖と光源氏の血統につながる薫大将を主 ている。『源氏物語』 源氏物語』を今でも原著で全編を読み通した 紫式部 私としては余り読んでみたいと思ったこと (11世紀初め成立) プレイボーイであるという先入観があ 1 9 6 5 それに、主人公・光源氏は、 かつて、 やんごとなき身分でかつイケメン 0) 登場人物も多く、 やはり、 は、光源氏を中心とする 最も紫式部の著書の雰囲 『谷崎・ は、この文章から始まっ 途中で投げ出してし が著した 主語が不明確で、 源氏物語 その上余 従って、 『源氏物 郎 に挑



紫式部画像(石山寺蔵・土佐光起筆) (出典:「源氏物語を行く」)

このように、本来『源氏物語』 訳本(?)を出している。 点にある。 の「水と文学」に取り上げたのも、 いのであろう。この ることに、 よっては「もののあわれ」を表現した文学であ き方、喜びと悲しみを著した人間の文学、 源氏とその周辺の人々、とりわけ女性たちの生 恋愛小説や、平安時代の宮廷文学ではなく、光 や市井の人たちが独自に翻訳本を出している。 瀬戸内寂聴(1922~) $\stackrel{4}{\overset{2}{\stackrel{}{\stackrel{}}{\stackrel{}}{\stackrel{}}}}$ まった。 円地文子 今まで、 現代でも魅力を感じている人々が多 (1905 - 86)与謝野晶子 『源氏物語』 さらには、 などが、それぞれ翻 は、 1878 1 を、 単なる長編 まさにこの 他の作家 最近では 本テーマ

であったことや第一皇子の母(弘徽殿の女御)であったことや第一皇子の母(弘徽殿の女御)である桐壺は、病弱 なった。 ていた。帝の心も癒された。光源氏は、 藤壺は、 その時に、先帝の娘である藤壺女御が入内した。 は激しく、 遭って若くして亡くなってしまう。 をはじめ他の女御・更衣などの嫉妬、 壺帝との間に生まれた第二皇子であった。 帝の寵愛を一手に給わっていた」 が、その容姿、 頭に出てくる「いとやむごとなき身分ではない に生き写しの義母・藤壺に思慕を抱くように 葵の上と結婚したものの、 前編の主人公である光源氏は、 12歳で元服し、 亡くなった桐壺と見間違うほどよく似 彼女の姿を絶えず思い起していた。 立ち居ふるまいがすぐれていて、 左大臣の娘の4歳年上 藤壺への思慕は この物語 桐壺更衣と桐 帝の悲しみ いじめに 亡き母 しか の冒

> われている。瘧病(かいるという皮肉(い少女(紫の上)を垣間見た。紫の上は、 加持祈祷を受けるために北山に出かけ、からいからいる。瘧病(おこり)を患った光 式部自身の中の品(中流階級)の中に優れな語る雨夜の品定めの場がある。この場面で、 ち切れなかった。 その正妻・葵の上の関係は、 果した。また、 退出していた思慕し続けた藤壺とついに逢瀬を の姪であった。その頃、 播磨の明石の浦に隠遁している人の娘 源氏の義兄弟)たちと、 のとなった。 に引き取り、 の噂を聞いた。また、 そのようなこともあり、 紫の上を二条の院 藤壺の身代わりとして大切に 続いて、 (おこり)を患った光源氏は、 (アイロニー) を語ったと (中流階級) の中に優れた人 光源氏は、 女性遍歴談や女性論 10歳位のかわいらし 宿直所で頭中 完全に冷え切った (光源氏の屋 三条の宮に 光源氏と (明石の そこで 将 藤壺 光

藤壺が、皇子 (冷泉帝) を生んだ。 その皇子

b



若き光源氏 (桐壺帝(右)は高麗の相人(左)に占わせた。 相人は数奇な運命を予言した) (京都国立博物館蔵「源氏物語画帖」)

(出典:「源氏物語を行く」)

訪れるが、 ために出家した。 の中宮は、 断ち切ることができない光源氏は、 に三条の宮に退出した。 なった。 廷の後見役にするようにとの遺言を残して亡く を交わした。 藤壺の中宮にそっくりに成長した紫の上と新枕 なく亡くなる。その葬儀が終った後、光源氏は、 光源氏との間で男子(夕霧)を生んだが、まも 大将に昇進し、春宮の後見となった。 不義の子(冷泉帝)が春宮に立った。 た。その後、桐壺帝は譲位し、朱雀帝が即位し、 を結ぶ。その女宮は、弘徽殿の女御の妹で、 たが、その夜ある女宮 宮中での桜花の宴の際、 弘徽殿の女御を超えて中宮(皇后)になった。 皇子を見て良心の呵責に悩む。さらに、藤壺 (第一皇子、 源氏の生き写しであった。 藤壺の中宮は、 その度に拒絶される。 光源氏の恋心を危ぶみ、 桐壺院は、 朱雀帝)に入内する予定であっ (朧月夜) に出逢い契り 藤壺の中宮への思いを 院の喪が明けるととも 朱雀帝に、光源氏を朝 光源氏は舞いを披露し ついに、 藤壺は、 三条の宮を 春宮を守る 光源氏は、 葵の上は、 藤壺

都に呼び戻され、 譲位を決意し、 結んだ。一方、 光源氏との結婚をためらったが、二人は契りを いと願った。 を明石の浦に招き、 の入道が光源氏の須磨退却の噂を聞き、 磨に退却することを決心する。 光源氏は、 不穏になって行く政情を思い、 明石の君は、 冷泉帝が即位した。光源氏は 都では、 朝廷の後見役として内大臣と 娘の明石の君と結婚させた 朱雀帝が眼病となり、 身の程を意識して、 明石では、 光源氏

> も絶頂な時期であった。 学び勉学に励んだ。光源氏は、 との間で、冷泉帝の後宮を二分することになる。 に入内していた弘徽殿の女御(弘徽殿の妹・四 女御として入内し、梅壺の女御となったが、 と相談して、 頭中将の娘・雲井雁と結婚した。 頭中将は太政大臣に、夕霧も昇進した。 臣)になり、二条の院の女君たちも安定し、 光源氏と葵の上との間の子・夕霧は、大学寮で 帝位を譲ろうとしたが、光源氏は頑なに阻む。 出生の秘密を奏上した。驚いた帝は、 37歳で亡くなった。中宮の護持僧が、 女とした。光源氏が終生思慕した藤壺の中宮は、 光源氏は、明石の姫君を引き取り、紫の上の養 君と結婚していた頭中将 に入内させることにした。2年後、 奉仕する皇女、ここでは朱雀院の妹)を冷泉帝 た紫の上は、 源氏の子・ への入内が決まった。 (今上帝) として元服し、 実質上 明石の姫を生んだ。このことを聞 嫉妬する。 前斎宮 の政権を握った。 光源氏は、准太上天皇に、 (皇大神宮 光源氏は、 (葵の上の兄)の娘) 朱雀院の子が、 明石の姫君が、 太政大臣 明 (伊勢神宮) 石の 藤壺の 前斎宮は、 光源氏に 冷泉帝に 君は、 (左大 春宮 最 既

になった。柏木(頭中将(この頃は太政大臣)上帝)が即位し、明石の女御の第一皇子が春宮生んだ。冷泉帝は、在位18年で譲位し、春宮(今君、後に今上帝の中宮)が懐妊し、第一皇子を君、後に今上帝の中宮)が懐妊し、第一皇子を君、後に今上帝の中宮)が懐妊し、第一皇子を君、後に対した娘・三の宮のことが気がかりで、光を亡くした娘・三の宮のことが気がかりで、光を亡くした娘・三の宮の名が、母(藤壺女御)

は不義の子) 亡くなった。 想し、仏道修行に励む。そして、 に光源氏と明石の中宮 に襲われながらも光源氏を支えてきたが、 れた柏木は、病に臥し亡くなる。紫の上は、 を生んだ。女三の宮は、不義の男子 出して煩悶する。明石の女御は、三の宮 引に契りを結び懐妊させた。このことを知った と四君との間の子) 宮)と朱雀院と女三の宮との若君 れて亡くなる。光源氏は、紫の上の亡き魂を追 んだが、 への思い出の手紙を焼き、思いを断ち切り、 昇進して行った。ここまでが、 今上帝と明石の中宮との子・三の宮 後に出家してしまう。罪にさいなまさ かつての藤壺の中宮とのことを思 光源氏が亡くなって9年の歳月が の二人は、美しく成長し、張り合っ は、 (明石の姫君)に看取ら 女三の宮にひか 光源氏も紫の 前編とも (薫) (実際 (**匂**宮) を生 つい 包包



明石の海 (対岸は淡路島、光源氏はここで明石の君と結 ばれ、明石の姫君(後の明石中宮)を生む) (出典:「源氏物語を行く」)

でいるの宮が成仏できないでいることを聞い てしまう。 を結婚させたいと願っていたのである。そこで、 拒否される。 して亡くなった。薫は、 君たちの将来を案じ、 とを知り、 の姫君(大君と中君)とひっそり暮らしてい宇治には、光源氏の異母弟の八の宮が、二 ある時、 、業の深さに出家を願うが許されない 宇治を訪ねるようになった。匂宮もそのこ 策略を巡らして、 しばしば歌を送った。八の宮は、 大君は、 一方、大君は、薫と中の宮 薫は八の宮と姫君たちのことを知 薫を怨むとともに、 薫に後見を託し、 大君に恋心を抱くが、 匂宮と中の宮を契らせ

(中君)

て、

まま、

父

? 八

うべき44

帖

0

あらすじであ

宇治10帖といわれるもの

で、

舞

台は宇治で、 その続編は、

薫を中心に、

匂宮が絡む物語

光源氏が紫の上を見舞う図 (第40帖「御法」、病が重くなった紫の上(右)を 光源氏(左)が見舞う図で、二人の間の小さな後姿 (悲しみの姿) が紫の上の懸命に世話をしている明 石中宮)

(国宝「源氏物語絵巻」名古屋・徳川美術館蔵) (出典:「源氏物語」新潮古典文学アルバム)

> た。 る時、 浮舟を垣間見て心惹かれた。空娘・女二の宮と結婚した。空 中の宮は悲嘆にくれた。 **匂宮は承諾した。既に匂宮の子を懐妊して** らの娘・六の宮の婿に匂宮を迎えたいと望 薫に看取られ亡くなった。 に身を投げようと決心した。 て、 経緯があっ 匂宮との子・若君を出産した。薫は、 う異母妹の浮舟の存在を告げられた。中の宮は、 れるようになり、 は、 屋敷に迎えるが、 一方、 薫は、中の君から、 秘密を持って苦悩し、 たもの って浮舟に強引に契りを結んだ。 匂宮も浮舟のことが忘れられずにい 足繁く通うようになった。 0 夕霧 薫は浮舟と契りを交わし 薫は、 (光源氏の 大君に似ていると 宇治を訪れた薫は、 匂宮は、 浮舟の 浮舟を巡って色々 思い詰めて宇治川 中の宮に心惹か 子 失踪に、 中 今上 0) ア宮を京 は、 いた 帝 浮 あ Á

病に臥

姫



宇治の北山 (八の宮が準拠していた地、手前は宇治川) (出典:「源氏物語を行く」)

都は、 叡山 早速手紙を託したが、 愁に満ちた自分の宿世を内省した。 遺かった宇治の女君たちのことを追想し ると疑うのであった。 通した。 を用意していることを知って、 を失った女性を救った。その女性は、浮舟であ では大騒ぎとなっ 薫は、 助けられた浮舟は、出家を望み果した。 薫が自分の一 また、 横川の高徳な僧都が、 明石の中宮に浮舟のことを話した。 薫は、 明 石の中宮から浮舟の消息を聞き、 大君、 浮舟が誰 周忌のための法要のため 中 浮舟は薫への返事を拒 -の宮、 薫は、 かに隠し 宇治の院で、 浮舟とい 激しく思い乱 0 据えられ その 世 つ 0 無常 頃 浮舟 の衣 7 僧 n 憂らの を

27) などのいわば宮廷のやんごとなき身分と 守藤原為時の娘であり、 それにしても長く、 ながらも和漢の書籍も学んでいた才女であ に仕えながら、 原氏の出身であるが、 武生で育ったといわれている。 もある。 いうより、 八間関係も複雑である。 族には、 武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」 以上が、『源氏物語』 後に、一条天皇の中宮彰子 紫式部の名前の紫は、 詠み人知らず) 文学などに長けた者もあり、 地方官という中位の身分の出 『源氏物語』 源氏物語におい かつ登場人物が多く、 などから取 藤原道長 の大あらすじである 父の任地である越前 作者の紫式部は、 を著した。 紫の (藤原道長の娘 たどれば 7 966 ひともとゆゑ たという説 が妬の 当然女 式部 であ 同 その 1 越 前

さ強く感じていたといわれている。 としては晩婚で藤原宣孝と結婚し、一女を儲け じて「紫」と称したか、周囲からそう呼ばれた ているが、夫が早く亡くなり、人の世 のではないかという説もある。紫式部は、当時 持ちながらも光源氏を支えた紫の上に魅力を感 のはかな

を始めとして、それに関係する人々、特に女性 なく本来の大河小説を思い起させる。 に例えられ、現代でいえば単なる長編小説では たちの有為転変は、まさに川の流れ、水の循環 として取り上げるのは、光源氏やその血統の薫 ところで、この『源氏物語』を「水の文学」

泉帝) の姫君 といえば、「海」であり、 事記』の山幸彦と海神(綿津見神)の娘・豊玉 養女とし、 に戻った光源氏は、娘の明石の姫君を紫の上の の入道の娘と契り、 遁し、明石の入道の世話になる。そこで、明石 穏な動きを避けるために、須磨・明石の浦に隠 姉妹にあたる。 め海神であり、 皇の神武天皇であった)を連想する。明石の浦 玉姫の妹・玉依姫との間にできた皇子が初代天 姫との物語 子を生んだ。このことは、 の密会(光源氏にとっては義母)、不義の皇子(冷 の生活での秘め事(父・桐壺帝の中宮・藤壺と そして、何よりのポイントは、光源氏が、都 の誕生)の呵責や、 (明石の女御、明石の中宮)は、第一皇 春宮(今上帝)へ入内させた。明石 (山幸彦と豊玉姫との間の皇子と豊 勿論、 明石の姫君は豊玉姫・玉依姫の 明石の姫君をもうける。 光源氏 明石の入道はさしず 先に取り上げた『古 皇位や政局を巡る不 (桐壺帝の第二皇 都

> 女御・中宮には、「 しているのである。 子)は山幸彦にあたる。このように、天皇家の 海 (水)の女」が深く関係

浮舟という名前自体が、川(水)の流れに翻弄 は仏の世界に救いを求めるのである。 象徴するものである。助かった浮舟は、 時に、この浮世のはかなさやもののあわれさを される舟であり、心もとない感じを与える。 巡っての恋争いをするが、これらの女性はその であった。この異郷の世界で、光源氏の第二世 る。「水の世界」に心の平安を願うのである。 て宇治川に入水自殺するまでに追い詰められ 間に挟まって苦悩する。特に、浮舟は、思い余っ 代の匂宮と薫とが、二人の姫君そして浮舟を 界」である。当時、 治は、都から見ると宇治川を挟んだ「異郷の世 さらに、後半の「宇治十帖」の舞台である宇 川は、 住む世界を隔てる境 最後に 同

921~33年にイギリス人・アーサー・ウェ 終らせている。源氏物語の各帖が、必ずしも現 浮舟が誰かに隠し据えられていると疑うことで によって外国でいち早く『源氏物語』 訳とはいえないという批判があるが、 である。これは抄訳版であり、 イリーが訳した『The Tale of Genji』が有名 身勝手さを断罪しているように思えるのである。 女の微妙な本性を理解し得ない男の浅はかさ、 ないという見方があるものの、最終の場面で、 代残されている順番とおりに書かれたものでは なお、『源氏物語』の外国語訳としては、1 紫式部は、この『源氏物語』の最後に、薫が、 必ずしも正 この訳 が世 に知 一確な

> にした図書まで出されている。 本文学に興味を抱く学者を輩出させたことの意 られるようになった。また、これを読んで、 義は大きい。現在、この英文翻訳文を日本語 Н

12世紀前半ないし中頃には製作されている。⑵ 『源氏物語』] を題材とした絵巻 が、

注

- $\widehat{\mathbb{1}}$ 訳『源氏物語』、 9 9 アーサー ・ウェイリー英訳/佐藤秀樹日本語 平凡社ライブラリー 2 0 0 8
- (2) 徳川義宣解説 美術社 $\begin{pmatrix} 1\\ 9\\ 8\\ 3 \end{pmatrix}$ 国宝 他 源氏物語絵巻』、 岩崎

(引用・参考文献

- 山岸徳平校注:『源 氏物語 (全6冊)』、岩波文庫 19
- 佐竹明広他:『源氏物語(全5冊)』、新日本古典文学体 (1993 - 97)
- 中野幸一・丸谷才一:『源氏物語』、新潮古典文学アルバム、
- · 秋山虔著:『源氏物語』、岩波新書(1978)
- ・日向一雄著:『源氏物語の世界』、岩波新書(2004)
- ・文・秋山虔/写真・中田昭『源氏物語を行く』、小学館 $\widehat{1}$
- 川選書(2008) 『源氏物語大辞典』編集委員会編:『源氏物語入門』、

(おおはしきんじ・東京農業大学客員教授

【編集部からのお詫びと訂 正

本シリーズ第1回の4月号37頁中段9行 詫びして訂正致します。 「歌舞妓」は「歌舞伎」の誤りでした。 目